

ちきりアイランドの人工干潟

風間 美穂

1950 年代までの岸和田の海岸部には、砂浜や干潟など、波打ち際の生物が生活できる環境が豊富にあり、さらに地引網の漁場や漁船の停泊地、子どもたちの遊び場などとして、地域の人々にも親しまれていました。しかし、1961（昭和 36）年 2 月から始まった臨海工業用地造成のための埋立工事により、それらは減少の一途をたどり、1966（昭和 41 年）年 8 月には、岸和田市内からすべての干潟や砂浜がなくなってしまいました。



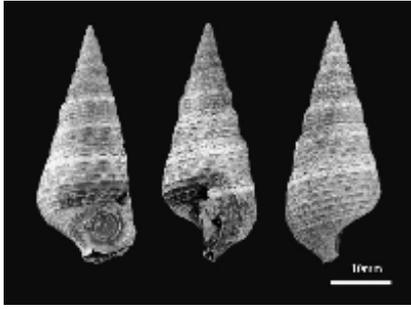
ちきりアイランドの人工干潟

それから 35 年後の 2001（平成 13）年、岸和田市内に再び干潟が誕生しました。岸和田市地蔵浜町の沖合約 300 m にある人工島、ちきりアイランド（阪南 2 区埋立地；岸和田市岸之浦町）にある北干潟（1 ha）です。その 3 年後の 2004（平成 16）年 2 月には、その南側に約 5.4 ha の南干潟も完成しました。学校団体による見学等でこれまでも利用されてきたのは、こちらの干潟です。

この干潟は、過去の埋立によって失われた環境を回復することにより、かつて生息していたいろいろな生物を呼び戻し、さらに干潟のもつ水の浄化機能も活用しようという目的で、人工的につくられたものです。人工干潟というと泥ばかりで建物を建てないことから、泥をたくさん海に投入すればできるのではないかとされるかもしれませんが、実際にはそんなに簡単なものではありません。

人工干潟造成の際は、泥や砂が強い潮の流れで流されてしまわないよう、まず干潟全体を囲い込む堤防をつくることから始まりました。次に、堺市の埋立地にある発電所の栈橋工事の際に出た、海底の軟らかい粘土約 33 万 m³ を干潟の土台として投入し、その後、この上に山口県蓋井島の砂を敷き詰めました。ただし、軟らかい粘土の上に直接砂を敷くと砂が粘土に沈み込んでしまうので、泥と砂の間に、トウモロコシを原料としてつくられた細かい網を敷きました。このように、自然の状態に近い干潟を造成するには、さまざまな工程や工夫が必要だったのです。

現在この干潟からは、かつて岸和田の海岸に多く生息していたと考えられるハクセンシオマネキ（カニ類：環境省レッドリスト絶滅危惧 II 類）、ウミニナ（貝類：環境省レッドリスト準絶滅危惧種）、ハマボウ



ウミニナ

フウ（植物：大阪府レッドデータブック絶滅危惧Ⅰ類）など、干潟特有の生物が確認されています。いずれも、人間がわざわざ放したのではなく、海流によって種子や幼生などが運ばれ、流れ着いて定着したものです。また渡り鳥でも、国際的に減少が危惧されているコアジサシ（環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類）が、夏の時期にこの干潟で卵を産み、子育てをしたのが確認されています。

この人工干潟は、以前にあった自然干潟に比べ、はるかに狭い面積しかありません。しかしこの干潟ができたことにより、40年近く岸和田市内では確認できなかった生物たちを呼び戻すことができました。

現在、きしわだ自然資料館ときしわだ自然友の会では、2009年4月から定期的にこの人工干潟の生物調査を行っています。くわしいことは自然資料館までお問い合わせください。

（かざまみほ：自然資料館学芸員）

史料に見る岸和田祭の歴史（1）

山中 吾朗

岸和田祭の歴史については、これまでも多くの書物に書かれていますが、史料に基づいて今一度整理しておこうと思います。

初期の祭りの様子を記した史料として「当町檀尻之濫觴五町御城入先後之一件書付写」（池田谷久吉氏収集文書）があります。文化5（1808）年に藩からこの年の祭りは8月13日の1日だけ許し、町方（本・堺・魚屋・北・南町）と浜方（中・大工・中之浜・紙屋・大北・中北・大手町）のどちらが先に城に入るかで争わないように、毎年城入りの順番は交互にするようにとの達しがありました。この史料はこれに対し、町方から祭りが始まったいきさつを記し、町方が先に城入りしてきた慣例を守りたいと藩に再考を求めたものです。史料はすでに『和泉志』第9, 10 合併号（1954年、和泉文化研究会）や『だんじり祭関係史料集』（1979年、岸和田市）に全文が掲載されていますが、岸和田祭の始まりについて記した現在知られている唯一の史料です。次に内容を見てゆきましょう。

延享2（1745）年6月、北町の茶屋新右衛門という人が大坂の祭り一天神祭と思われまゝ一が賑やかなことを見て、町の人にせめて祭りの日に提灯でも出そうと提案しました。藩からの許可も下り、60張の提灯を調べ、祭りの前夜と当日に家々の軒先に御神灯を出しました。他町もこれにならって御神灯を出しました。同年8月の祭り（当時、岸城神社の祭りは6月・8月・11月の各13日でした）では、藩主から「両御宮」（岸城神社と三の丸神社）へ大幟4本を奉納され、また町へは「印付の小幟式拾本・わく入の太鼓壺ツ」が下されました。これを受けて町の子供たちが紅の投頭巾をかぶり、采配を持ち、「てうさや、えやえや」と掛け声をかけながら城中と町中を廻りました。これが祭礼の初めだと記しています。

一般に岸和田祭の始まりは元禄16（1703）年と言われていますが、この年は岸和田藩主岡部長泰が三の丸に稲荷神社を勧請した年です。確かに神社が勧請されたならば、その直後から何らかの神事が営まれ

たであろうと考えられますが、提灯も出していなかった段階から、延享2年を画期として町の人々が祭りに参加するようになりました。次いで翌延享3年には、初めて「檀尻」が出てきます。

一、延享三寅年八月、五町より軽き引檀尻に作り物等致し差し出し、その後追々増長し、村・浜にも祭礼に出し候（様脱カ）相成申し候、

延享3年に五町が「軽き引檀尻」に作り物を載せて引き、その後岸和田村や浜も出すようになったと記されています。「軽き引檀尻」の詳しい様子は想像するしかありませんが、簡単な箱車のようなものに飾りとなる作り物を載せて引いた、という程度の意味でしょうか。ともかく、この年だんじりと呼ばれるものが岸和田で初めて引かれました。

初期のだんじりについて別の史料には次のように書かれています（「高井家文書」）。

覚

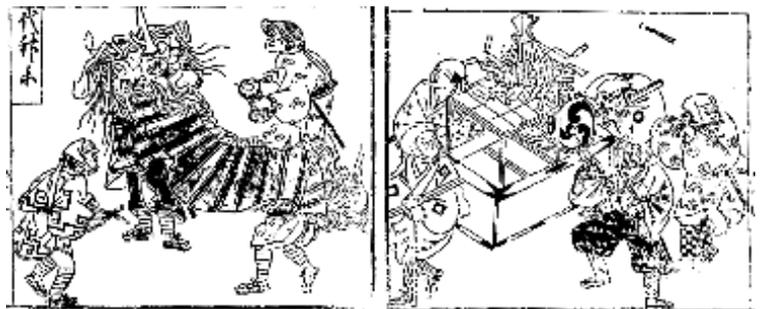
一、みこし壺組		北裏町
一、引だんじり	但し、はやし方仕り候	中町
一、小だんじり	但し、人形乗せ	北大手筋
一、引だんじり	但し、作り物乗せ	中之裏町
一、荷ひだんじり	但し、太鼓たたき	大工町
一、引だんじり	但し、土俵積	中之浜

これは宝暦2（1752）年の史料ですが、初期のだんじりには「引だんじり」の他に、「小だんじり」「荷ひだんじり」があり、また、神輿もありました。「荷ひだんじり」は文字通り、担ぐだんじりでしょう。また、それぞれ乗せるものが異なっています。はやし方や太鼓たたきのように、人を乗せているもののほか、作り物や土俵を乗せているものもあります。様々な形態のだんじりがあったことがわかります。

「当町檀尻之濫觴五町御城入先後之一件書付写」には、北町の老人の証言が書かれています。これによりますと、先述の御神灯の由来を述べた上で、次のように記しています。

已前は神楽獅子台は五尺に二尺五寸計りの車付引檀尻にて、太鼓打老人乗り、御祭礼相勤め候事と承り候、尤もこの獅子頭は彫物師武左衛門の作にて（中略）、右の獅子はこれ有り候えども、町内に舞ひ候人これ無き故、包近村より雇ひ、又は高月村より雇ひ舞い申し候、その翌年、五町とも荷ひだんぢりはやしかたと相成り、獅子舞は相やみ申し候、

以前は神楽獅子台という5尺×2尺5寸（約150cm×75cm）ほどの車付き引きだんじりがあり、それに太鼓打が一人乗って祭礼を勤めました。神楽（獅子舞）は、町内に舞人がいないために、包近や高月から雇っていましたが、やがて行われなくなると記されています。



『人倫訓蒙図彙』より

初期のだんじりが神楽の獅子頭を乗せ、獅子舞を行っていたということですが、それは『人倫訓蒙図彙』「代神楽」の図にある長持に近い形態のものだったのではないのでしょうか。太神楽の集団は長持を担いで各地を巡ります。図の長持は太鼓を載せ、屋根に御幣を付けてそれが神聖なものであることを表しています。周りには獅子舞と笛・鼓・ささらではやし立てる者たちがいます。太神楽の長持が変化し、だんじりに発展していったとは考えられないのでしょうか。

次に天明4(1784)年のこととして、次のように記されています。

天明四辰年、順次組に町方かこひ檀尻に申して、屋根杉板にて破風を付け、墨紅などは蛇腹をふき、すだれをかけ、四方四人にて荷ひ、はやしかた・太鼓・三味・はちすり・金(鉦)打ちにて町々ぞめき歩き申し候、

天明4年には、だんじりに杉板の破風のついた屋根があり、墨や紅で彩色され、蛇腹状の装飾も施されていました。それを四人で担うのですから余り大きなものではないでしょうが、この頃にはだんじりの形態も色々な装飾を施し、屋根のついたものになっていったことがわかります。

次いで天明5(1785)年に大津から古いだんじりを借りたところ、城門を通れなかったため、柱を仕替えて城内へ引き入れた、と先の北町の老人は証言しています。それまでは城門を通れる小さなだんじりだったのでしょう。これが現在の岸和田だんじりの原型と考えられます。

(やまなかごろう：郷土文化室学芸員)

Information

■自然資料館からのお知らせ■

企画展「自然散歩・戦前の泉州」

戦前の泉州の豊かな自然環境を、戦前に発行された絵葉書や観光パンフレット、当時採集された標本類などで紹介します。

- ・会期：2009年11月1日(日)～11月29日(日)
- ・入場料：無料(2～3階の展示見学は有料)
- ・時間：午前10時～午後5時(入場は4時まで)
- ・期間中の休館日：毎週月曜日(11月23日は開館)・11月4日・11月24日
- ・場所：きしわだ自然資料館1階ホール(岸和田市堺町6-5・南海本線岸和田駅から徒歩15分)

■岸和田城の展示案内■

企画展「収蔵絵画展」

教育委員会所蔵の絵画作品の中から優品約30点を選んで展示します。

- ・会期：2009年9月30日(水)～11月29日(日)
- ・入場料：大人300円 中学生以下無料
- ・時間：午前10時～午後5時(入場は4時まで)
- ・休場日：月曜日(10月12日, 11月23日は開場します)
- ・主な展示作品
菱田春草筆「月下の雁」 上村松園筆「新蛭」
小川翠村筆「春秋」

※お願い [fromM]は、学校教職員に1部ずつお配りください。

担当の方はお忙しいところ申し訳ありませんが、よろしくお願い申し上げます。

【from M】では、みなさまからのご意見、ご感想、ご質問等をお待ちしています。博物館での学習、研究等に関する情報、地域の自然環境や歴史に関する面白いトピックスなどがありましたら、ぜひご投稿ください。お名前、連絡先、所属等をご記入の上、右記の宛先までお送りください。電子メールでも受け付けています。

連絡・問い合わせ先

〒596-0072 岸和田市堺町 6-5 きしわだ自然資料館
TEL: (072) 423- 8100 FAX: (072) 423- 8101
Email: sizen@city.kishiwada.osaka.jp
自然資料館ホームページ URL:
<http://www.city.kishiwada.osaka.jp/site/shizenshi/>
Yahoo Japan の検索で「きしわだ」と入力し、検索すれば、簡単です)